様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４２７３

研究課題名（和文）欧米大学間における女性の教育研究交流に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Study on the International Cooperation of Women Academics among the Western Universities

研究代表者
香川　せつ子（Kagawa, Setsuko）

西九州大学・子ども学部・教授

研究者番号：００１８５７１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、19世紀末から20世紀初頭の欧米の大学間における女性大学人の交流や協力関係についてその実態を解明した。そのために、まずイギリスから女性教育史研究者を招聘した国際シンポジウムを開催し、トランスナショナルな女性教育史研究の枠組みと方法論を検討した。次いでアメリカとイギリスの大学での資料調査により、英米間アメリカの女性大学人の交流を、①留学、②女性研究者の移動、③国際大学女性連盟の結成経緯と活動という３点において把握した。また研究期間の後半では、女性大学人の国際的活動に対する日本の関わりを、同時期に日本から英米に留学した女性大学人の事例検討を通して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed to examine the international cooperation of women academics for the promotion of women's higher education during the nineteenth and the early twentieth century. The historiography of women's education was examied from gender and transnational perspective in two international symposia by British and Japanese researchers. The transnational activities of women academics were explored, focusing the interrelationship of British and American women's colleges through the interchange of students and teachers, and their efforts for the foundation of the International Federation of University Women. The role of Japanese women was also examined by case studies of three Japanese women academics who studied abroad in Britain and the USA.

研究分野：教育学

キーワード：女性大学教員　トランスナショナル　留学生　国際交流　イギリス　アメリカ　ジェンダー　大学史

１．研究開始当初の背景

（１）欧米諸国では 19 世紀後半に女性の高等教育が成立したが、その時期や制度、教育内容は国によって様々であった。こうした状況のもと、自国で得られない教育機会を求めて他国に留学する女子学生や、教師として植民地や国外に移住する女性たちが出現するようになった。例えば、ヨーロッパで最も早く女性に門戸を開放したスイスの大学には、ロシア、アメリカ合衆国、イギリスから、多くは医学学位の取得を求めて入学する女性の姿がみられた。また、アメリカの女子大学を卒業した女性のなかには、より高度な学問を求めてヨーロッパの大学に留学する者がいた。彼女らの多くは帰国後、医師として、あるいは教師として自国の女子教育の発展に貢献した。

留学という経験は、一国で発達した教育の制度や方法、文化が他国へと転移する直接的なルートととらえられる。しかし、女性の留学の実態は、欧米諸国間のものに限っても十分に把握されているとは言い難い。そこで、本研究では、英米の大学間の関係に焦点を合わせながら、女子学生や教員の国際的移動の実態を解明したいと考えた。

（２）大学の国際化の歴史を女性の行動に焦点を合わせて検討することは、男女共同参画という現代の大学が直面する課題を歴史的なパースペクティブで考察することでもある。イギリスにおける女性の高等教育は、高度な教育機会を求める女性教師やフェミニスト女性たちの運動によって開始された。19 世紀末には教員として大学での研究教育に携わる女性たちが登場し、大学における女性の地位の向上をめざすアメリカの女性大学教員と連携して活動するようになった。

女性大学人の国境を超えた協働は、第一次世界大戦後に国際大学女性連盟の結成へと向かい、欧米だけでなくアジア太平洋地域を含む広範な活動へと発展した。女性大学教員による国際的活動の展開を追跡することを通して、女性による大学への参画をグローバルな視点から、歴史的社会的文脈において明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

本研究では、19 世紀末から 20 世紀初頭の欧米大学における女性の国際的な教育研究交流の実態と歴史的意義について考察する。これにより、ジェンダーとグローバル化という視点から、大学史の再考を試みた。

（１）イギリスとアメリカの関係を中心に、初期の女性による留学の動機と実態、留学前後の経歴を明らかにする。

（２）イギリスとアメリカの女性大学人による連携と協働が、国際大学女性連盟の結成へと発展した経緯および同連盟の初期の活動を明らかにする。

（３）日本からイギリス、アメリカに留学した女性の経歴と留学目的、留学時および帰国後の活動を、事例を通して検討する。

３．研究の方法

（１）国際シンポジウムの開催

本研究の枠組みと方法を具体化するために、平成 28 年 2 月に、イギリス女性教育史研究の第一者であるジョイス・グッドマン氏（ウィンチェスター大学名誉教授）を招聘し、「女性教育史研究とトランスナショナリズム」と題する国際シンポジウムを二度にわたり開催した。グッドマン氏による基調講演の第 1 回（於：京都大学）は、女性教育史研究におけるトランスナショナルな視点の有効性と研究方法について論じ、第２回（於：青山学院大学）は、20 世紀前半の女性教育の展開を、トランスナショナルなアクティヴィズムという観点で検討したものであった。講演のなかで、グッドマン氏は第二次世界大戦前の日本女性のアメリカ留学と国際的な活動に言及し、欧米以外の国、とりわけアジア女性の経験にも目を向けるべきことを指摘した。この指摘は重要であり、英米大学間の女性の交流を検討するにあたっては、トランスナショナル・ヒストリーの視点と方法が不可欠であることが認識された。

（２）海外での文献調査

①平成 28 年 9 月に、ケンブリッジ大学の数学トライポスに合格後、アメリカのブリンマー・カレッジの教授となったシャーロッテ・スコットに関する資料を収集するために、ブリンマー大学図書館で調査を行った。ブリンマー大学では、スコット等数名のケンブリッジ大学出身者とともに、津田梅子や河井道等日本からの留学生に関する資料も入手することができた。

②平成 29 年 9 月に、ケンブリッジ大学およびオックスフォード大学図書館での文献調査を実施した。ケンブリッジ大学では、当該時期にアメリカからケンブリッジ大学に留学した女子学生や国際大学女性連盟の初期の活動に関する資料を入手できた。オックスフォード大学での調査は、20 世紀初頭に同大学に留学した黒田チカに関する資料収集を目的としていたが、短期間であったため、同大学における有機化学研究の歴史について一定の資料が得られたものの、留学生活に直接関係する資料は入手できなかった。

４．研究成果

本研究は、香川によるイギリス女性高等教育史研究の過程で着想したものであり、研究開始の当初は、英米を中心とする欧米大学間の女性の交流に関心が集中していた。しかし、グッドマン教授を招聘して二度の国際シンポジウムを実施するなかで、欧米に限定されないグローバルな視点から、本テーマにアプローチすることの重要性を認識し、日本の女子高等教育との関連についても射程に含めることとした。明治期における日本の男性の留学や人材移動に関する先行研究の蓄積に

比して、女性の留学や国際的活動を主題とする歴史研究は、アメリカとの関係を中心に近年盛んになってはいるものの、対象が限られている。そこで、イギリス女子教育史及び日本女子高等教育史の研究者と共同研究体制を組むことによって、戦前期の女性の留学の実態を量と質の両面から具体的に把握することとした。主な研究成果を以下に記す。

（1）ジェンダーとトランスナショナルという研究の視点および方法について

女性の歴史を考察するうえで、トランスナショナルな視点はきわめて有効である。女性は長らく国民国家の権力から排除され、一国史的な歴史記述には稀にしか登場しなかった。トランスナショナルな研究上の視点は、国家間の政治力学的な関係を追う歴史において見落とされてきた女性や少数者に光をあて、彼女らの国境を超えた移動や交流を可視化した。トランスナショナルな研究の進展につれて、帝国から植民地へと移動した女性教師や医師たちの活動が明らかとなった。高等教育の機会を求めて他国に留学した女性についての研究も、この発展線上に位置づけることができる。

トランスナショナルな研究は、歴史のエージェンシーとしての女性に関する考察を深めるうえでも有効である。女性のエージェンシーの検討に際して、グッドマンはフーコーやブルデューの理論を援用して論じ、女性教師の人生に留学という経験が果たした役割を、キャリアの形成や主体性の確立等、多様な側面から考察した。

グッドマン氏の講演は、ジェンダーとトランスナショナルの視点からの女性教育史研究にとって示唆に富んだものであり、全文を翻訳して、山﨑洋子、高橋裕子、金澤周作、並河葉子の各氏によるコメントとともに、学術雑誌に掲載した。

国際シンポジウムの成果をふまえて、本研究では、イギリス、アメリカ、日本の三国間における影響関係を、女性の留学とそれを可能にしたネットワークに着目し、個別事例の検討を通して考察することとした。

（2）英米大学間の女性の交流、連携と国際的協働について

①アメリカからイギリスへの留学

アメリカは女性への高等教育を世界に先駆けて実現した国であり、1833 年における共学制のオーバリン大学創設がその端緒とされる。イギリスではそれより遅れ、1848 年に高等教育をめざすベドフォード・カレッジが創立されたものの、大学レベルの教育機会としては 1869 年のガートン・カレッジの創設が最初であった。ケンブリッジ大学の学位取得を目的に掲げた同カレッジでは、トライポス（優等卒業試験）合格を目標に男性と同一の教育が施された。1880 年に女性のトライポス受験が公式許可され、優秀者リストに女性の名が掲載されるようになると、ケンブリッジ大学の伝統と学術水準の高さが人気を呼び、アメリカ合衆国から女子留学生を呼び寄せるようになった。

ノヴァク（Tannya M.Novak, Women's Education: Connection between America and Cambridge, 1874-1914, 1990、未公刊）の研究によれば、1874 年から 1914 年までの期間にケンブリッジ大学に留学したアメリカ人女性は 67 人いた。そのうち 9 人がガートン・カレッジに在籍、残る 56 人はニューナム・カレッジの学生であったという。平均的な留学期間は 1 年前後であり、帰国後は教育機関で働くか研究をする者が三分の二であった。19 世紀末には、イギリス、カナダ、ヨーロッパ諸国の大学への留学希望者向けに、各大学で女性に開放されたコースを紹介するハンドブックも出版されるなど、女子学生の国境を超えた移動は一種の流行となっていた。

②ケンブリッジ大学とブリンマー大学とのリンク

英米大学間の交流の要となったのが、ケンブリッジ大学とブリンマー大学との絆である。ブリンマーの二代目学長となるケアリ・トマスはライプチヒ大学とチューリッヒ大学に留学後に訪英し、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の女子カレッジを見学した。なかでもガートン・カレッジの方針に共鳴したトマスは、男性と同等レベルの教育を授けることをブリンマーの目標に据え、ガートン出身のシャーロット・スコットを准教授に採用した。女性で最初に数学トライポスに合格後、ロンドン大学で理学学位を取得したスコットは、ブリンマー大学に着任後、イザベル・マディソン等ケンブリッジ大学のトライポスに合格した女性たちを迎え入れた。アメリカは、スコットが数学者として活躍する舞台を提供したのである。1905 年に、スコットはアメリカ数学協会の会長に選出され、女性が学界に進出する足場を築いた。

③国際大学女性連盟（International Federation of University women）

アメリカでは、1882 年に、女性の高等教育の水準向上と女子卒業生の社会的活躍の場を拡大することを目標に大学女子卒業生協会(Association of Collegiate Alumnae)が結成された。イギリスにおける女性大学人の組織的行動は、アメリカに遅れること約 30 年、1910 年の全英大学女性連盟（British Federation of University Women）の結成で始まった。国際大学女性連盟は、これらの団体の活動を基盤として、1920 年、第一次世界大戦後の国際協調の気運を背景に結成された。その目的は世界各国の女性大学人の相互理解と友好を図り、もって互いの利益と協力を増進することである。

女性大学人の国際的組織化を中心になって推進したのがロンドン大学教授のキャロライン・スパージョンとバーナード・カレッ

ジ学監のヴァージニア・ギルダスリーヴであり、ブリンマー大学のケアリ・トマスもまた重要な役割を担った。イギリス、アメリカ、カナダの三か国の女性大学人組織で発足した国際大学女性連盟は、インド、オランダ、ノルウェー、オーストラリア、ベルギー、フィンランド、イタリア等の組織をメンバーに加え、1930年代半ばに加盟国は30を超えた。連盟は英米の主導で運営され、会議で使用する言語（英語）や会場への地理的アクセスの点でも非西洋圏は不利な立場に置かれた。国際大学女性連盟については、近年欧米でもトランスナショナルな視点からの研究が盛んであり、その歴史的意義についての考察を深めることが今後の課題である。

（３）日本から英米大学への女性の留学とネットワークについて

英米大学間の女性の教育研究交流の歴史的展開を、グローバル化という現代的課題から考察するならば、非欧米圏への普及や影響関係を視野に入れなければならない。グッドマン講演の指摘をふまえて、英米主導で発展した女性高等教育の国際化に対して、日本の女子高等教育はどう関与したかの解明が必要になってくる。本研究では、国境を越えた人の移動である留学を切り口に、この問いを追求することとした。

男性留学生が日本の近代化、工業化に果たした役割がよく知られているのに対して、女性の留学はその数も少なく看過されがちであった。しかし、近年では、日本からアメリカへの女性の留学に関して、優れた研究が発表されている。なかでも、津田梅子を中心とする日米のネットワークについては、高橋裕子等の先行研究によって、ブリンマー大学留学後の津田梅子による女子英学塾設立、それへのブリンマー大学同窓会による支援、日本女性のアメリカ留学を促進するための奨学金の創設等をめぐり、米日双方の女子教育者の意図や影響が明らかにされている。また日本とイギリスについては、安井てつ、大江スミ等の留学に関する研究がある。しかし、戦前期の女性の留学を俯瞰する研究は存在しない。

以上をふまえて、本研究では、戦前期の女子留学の実態を量と質の両面から把握することとし、行政資料等から女性の留学の全体的傾向をみるとともに、家政学の大江スミ、英文学の上代タノ、化学の黒田チカを事例に、留学の動機や目的、留学生活、留学後の活動および彼女らを支えたネットワークについて検討した。その成果の一部を海外雑誌に投稿中である（*Espacio, Tiempo y Educación*）。しかし、これまでの研究で明らかにできたのは、全体のなかの一部分に過ぎない。官費による留学は行政資料から女性の留学者を確定することが可能だが、私費による留学生の総数を把握するのは容易ではない。「戦前期女子留学生の collective biographies」の作成をめざして、補助期間終了後も継続調査を進める予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　４件）

１．香川せつ子、ジョイス・グッドマン、高橋裕子、山﨑洋子、金澤周作、並河葉子「特集　国際シンポジウム　トランスナショナリズムと女性教育史研究―ジョイス・グッドマン教授招聘研究セミナーの報告」『女性とジェンダーの歴史』第 4 号、2017 年、１～40 頁、査読無。

２．ジョイス・グッドマン（中込さやか、内山由理訳）「女性教育のトランスナショナルな展開と国際的ネットワーク―イギリス、アメリカ、日本」『女性とジェンダーの歴史』第 4 号、2017 年、3～23 頁、査読無。

３．ジョイス・グッドマン（香川せつ子、内山由理、中込さやか訳）「イギリスにおける教育史研究の潮流―ジェンダー、トランスナショナリズム、エージェンシー」『西九州大学子ども学部紀要』第 8 号、2017 年、93～122 頁、査読無。

４．香川せつ子「女性、ジェンダー、教育の歴史―イギリスにおける研究の到達点と課題」『女性とジェンダーの歴史』第 3 号、2016 年、93~122 頁、査読無。

〔学会発表〕（計　２件）

１．香川せつ子、佐々木啓子、中込さやか、内山由理「比較女性教育史の可能性を探る―ジェンダー、トランスナショナリズム、ネットワーク」比較教育社会史研究会 2017 年度春季例会、2018 年 3 月。

２．香川せつ子「黒田チカのイギリス留学と男性科学者ネットワーク」比較教育社会史研究会 2017 年度春季例会、2018 年 3 月。

〔図書〕（計　１件）

香川せつ子（共著）『英国の教育』東信堂、2017 年、67～76 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

香川せつ子　（KAGAWA, Setsuko）
西九州大学・子ども学部・教授
研究者番号：00185711

(２)研究協力者

中込さやか（NAKAGOMI, Sayaka）
内山由理　（UCHIYAMA, Yuri）
佐々木啓子（SASAKI, Keiko）